

研究ノート

子ども・祭礼・地域

安 富 俊 雄

はじめに

今日では子どもをめぐるさまざまな問題がニュースを通して毎日のように伝わってくる。閉塞した現代社会のなかで弱者である子どもの存在が問われている。子どもを取りまく社会環境が大きく変わろうとしている。

子どもの問題といえば、乳幼児虐待のニュースを耳にするようになって久しい。だが、子どもの虐待は近年の問題ではない。すでに1932年（昭和8）に児童虐待防止法が施行されている。この時代は子どもの雇い主が子どもに過重労働させたことが問題として取り上げられた。ところが、今日問題になっている児童虐待は親が自分の子どもを虐待する時代である。2000年11月に児童虐待防止法が施行され、子どもの保護に国をあげて力を入れてきたが、児童虐待の件数は一向に減少せず、むしろ増大傾向にある。厚生労働省の統計によれば、2013年には児童虐待の件数は7万3千を超え、10年前の2.8倍に達したという。その背景には、核家族化が進行するなかで、子育てが上手くできない親のストレス、離婚・再婚の増大による家庭環境の変化などが考えられる。同時に都市化による地域環境の変化も児童虐待増大の要因の一つであろう。

また、これまで子どもは遊びを通して成長するとされ、その遊び方は自然環境や公園などでの外遊びや集団遊びが中心であったが、今日ではテレビゲームの普及により、室内しかも一人遊びが特色として挙げられるようになり、子どもの精神的身体的成長に大きな不安要素を抱えている。さらに、かつて子どもは地域によって育てられてきた。子育ては地域が行うものとされていた。子どもの成長は遊びを含め地域社会の責任とされ位置づけられてきた。しかし、今日では社会変化とともに家庭やそれを取り巻く地域も大きく変容してしまった。

そこで、子どもの成長を考えると、これまで子どもはどのような存在と考えられ、地域社会に位置付けられてきたのか民俗的な視点から考えてみたい。

子どもの成長とお祝い行事

明治初期、日本に來日し、大森貝塚を発見したアメリカの動物学者E・S・モースは『日本その日、その日』のなかで、「日本ほど子供が大切にされている国はない」¹⁾と記している。彼は、わが国では子どもが生まれてから成長の過程で、親が子どもに寄り添い見守る姿、数々のお祝い行事が行われていることに驚嘆の意を表している。西洋では子育てに関するお祝い行事がどの程度行われているか定かではないが、確かにわが国の子育てに関するお祝い行事は産まれる前から

生まれて1年を経過するまでの間でも多くの行事が行われている。現在、継承されている主だった行事を挙げると、帯祝い（妊娠5か月目の戌の日に安産の岩田帯を腹帯に巻いてお祝いする）、お七夜（出生7日目に着衣に袖を通し、名前が命名される）、初宮参り（初めて家の外に連れ出し、近くの神社にお参りする。一般に男子が生後32日目、女子が33日目に行うとされている）、お食い初め（生まれて百日目に、一人前の人間として成長し、一生食べることに困らないようにとの願いを込めて行われる）、初誕生祝い（満1歳の誕生日を祝う。「力餅」といって1升餅を背負わせ歩かせて元気に育つように願う所もある）などがある。

この他、今日ではほとんど消失してしまったミツメ（三日目）の祝いなどが地方によってはまだ残存している所もある。こうした多くの産育儀礼は、裏を返せば近代に至るまで死産や乳幼児の死亡率が高かったことを反映している。また今日では、子どものお祝い行事として最もポピュラーなのは七五三である。七五三は三歳の男女、五歳の男子、七歳の女子の成長を祝って神社に参拝し、お祓いを受ける。もともとは誕生日や正月吉日に行われていたが、江戸時代徳川綱吉の時から盛んになり11月15日と決められ、以後今日に至っている。

わが国の民俗学研究者である宮田登も「世界各国の民俗資料を比較してみても、日本文化ほど子どもが生まれてから成人に達するまでの通過儀礼の祝いを、細かに定めているところは見あたらない」²⁾と述べている。

以上のように、子育てに関するお祝い行事は、子どもの成長を願うとともに地域の一員としての成長を願い、地域ぐるみでお祝いしていたことを強調しておきたい。また、子育てに関するお祝い行事は神社との関係が深いことがわかる。つまり、地域の身近な神社によって子どもの成長が見守られ、やがて子どもが成長すると、今度はその神社の氏子として迎えられ地域の一員となったのである。

子どもと祭礼

さて、神社では年間を通してさまざまな祭礼行事が行われているが、その行事のなかでもメインの行事では子どもは派手な衣装を着飾ったりして祭りの象徴的な存在として重要な役割を果たしていることが多い。今日では一般的に祭礼時に登場する子どもは大人の代役として見られがちである。確かに過疎化が進行する地域では青年層が減少し、子どもがその代役をしている姿が多々見られる。また、余興となると子どもを取り込んだ趣向を凝らしているのも事実である。一昔前は子ども相撲などが盛んに行われ、今日では子ども神輿が取り入れられている。

しかし、古式にのっとり伝統を継承している祭礼のなかには、今でも子どもが明確に神事の一端を担う一役をはたしている所がある。それは、子どもは神様に近い神聖な存在として、神聖な役割を担っているからである。つまり、子どもは神聖な祭礼にとって不可欠な存在なのである。福田アジオは「信仰的な意味を持つ年中行事を子どもたちが担うのは、大人たちの関与が後退したからではなく、子どもが神に近い神聖な存在だからである。その神聖な存在に対して、ムラ内の分業として一定の行事を担当させたと解すべきであろう」³⁾と述べている。

では、なぜ子どもが神事のなかで重要な役割を果たすのだろうか。

一般に子どもは、社会的には半人前の人間と見られ、高齢者などと同様、社会的弱者とみなされている。かつて子どもをジャリ（砂利）、ガキ（餓鬼）、コゾウ（小僧）などといった非人格的な呼称でよんだのはその表れであろう。

わが国では「七つ前は神の内」とか「七歳までは神の内」という民間信仰があった。これは、子どもが身体的に弱く、7歳まで生き延びてやっとこの世の人間として認められるまでは、この世に生を受けて、この世と異界を行ったり来たりする存在とされた。そのため子どもは異界に通じるものとして大人とは異なり、神により近い存在としてみなされ、聖なる存在として神と人をつなぐ尸童（よりまし）の役を担ってきたのである。飯島吉晴は「……子どもが此の世の人というより、むしろ神に近い存在であることを表しており、祭礼や神事に尸童として使われるのもこのためといえる。尸童は土地によって勅使・頭人兒・ヒトツモノなどさまざまな名称でよばれているが、立派な衣裳や美しい化粧を施して精進潔斎し、神と人やムラの生活秩序を媒介する役割を果たしている点では共通している。また神幸の行列で中心となる尸童は肩車や馬に乗せられるが、これは土を踏ませないようにするためであり、尸童の神聖さを表している」⁴⁾と述べている。また、宮本常一⁵⁾や宮田登⁶⁾も同様に子どもが神に近い存在であると著書のなかで述べている。

では、子どもが神に近い存在とされたのはいつ頃だろうか。

飯島は「日本の古代社会では、宮中の火炬き小人や籠を守る戸座（へざ）をはじめ、神社の小物忌や火焚き童女など聖なる水火を司る役は小童と定められていた」⁷⁾と述べているように、わが国ではかなり古い時代から、子どもは神聖な存在とされてきたようだ。身近な例としては、私自身稚児を経験した。稚児は生き神的存在とされている。また熊本県阿蘇の火祭りの童女、和歌山県古座町の御船祭りの稚児など、古式にのっとって継承されている祭礼では、子どもが神事のうえで重要な役割を果たしていることをこれまで調査を通して見ることができた。

また、かつて地域では祭礼など非日常的な活動（行事）において、子どもの役割を明確にしているところが多かった。例えば、正月、お盆、祭礼時など季節の節目に来訪神をともなって各家を訪問し、悪霊を払い新しい命（福）を招来するための役を子どもが担っていた。そして悪霊を払ってもらおうと、それぞれの家では子どもたちにお菓子やお小遣いをふるまった。

その他、現在も子どもが関わる神事として継承されているものに「亥の子」行事がある。亥の子は子どもが主役の神事で西日本を中心に行われている農耕儀礼である。旧10月亥の日に行われる。亥の子石という石を綱の真ん中につけて四方八方から石を引き揚げ、みんなで歌を歌いながら地面に石をたたきつける。それは大地の精霊に活力を与えて来年の豊作を祈願するのである。神事が終了すると訪問先の家で御菓子や餅をもらったりした。

子ども組と地域

こうした地域の祭礼などを担う子ども集団を「子ども組」と称した。子ども組は7歳になった

子どもが初めて地域のなかで社会的役割をはたす集団である。おおかた7歳から14歳で構成され、年長者を頭としたタテ社会で親方・子分の関係をつくる。かつて存在したガキ大将をトップとした子どもの遊び集団は子ども組の名残りかもしれない。また、子ども組は組織としては大人の干渉をうけない自治組織であったことが大きな特色である。子ども組は一人前の社会的一員となるための社会的訓練を受ける場と考えられ、年中行事や祭礼時などの特別な時期に結成される。そして15歳になると、子ども組から若者組に移動して本格的に社会人としての仲間入りをする。また、7歳になると神社の氏子入りをして地域の一人員としての仲間入りをした。このように7歳というのは幼児から子どもに移行する人生の重要な節目であった。

なお、子ども組はほとんどが男子によって構成されていた。

以上のような地域に根ざした子ども組も戦前には消滅してしまった。戦後は子ども会が組織されたが子ども組のような自治組織ではなく、親主導の子ども組織であった。現在も活発に活動している地域や県もあるが全国的には衰退傾向にある。

世俗化・孤立化が進行する現代社会では、かつての子ども組のような地域の子ども集団の形成を期待することは困難かもしれない。しかし閉塞感が強まり、自治会さえ成立が危ぶまれている地域が増大する時代にあって、そこに在住する人びとや家庭が地域再生を旨とし何らかの拠り所を起点として寄り合い、点から線、線から面への活動を通して地域の再生ができないものか。今日の地域では、子どもの成長を受け継ぐ拠り所がないし、大人にも子どもを育てようとする意識もあまり感じられない。その意味では地域の伝統文化である祭礼行事が唯一心の拠り所であり大きな役割を担っていると思う。いい換えれば祭礼行事こそが地域再生の起爆剤となることを期待している。地域の再生がない限り子どもをはじめ生き生きとした地域社会の将来はあり得ない。

これまで、祭礼調査のため西日本各地を中心に特に諸島など周辺部を訪問してきたが、地域組織の崩壊が急速に進んでいる。これまで、先人たちが築いてきた良き伝統を子ども期だけでも子どもたちに継承することが、地域組織再生の端緒になるのではないかと思う。

引用・参考文献

- 1) E・S・モース『日本その日、その日』1 p11 東洋文庫 171 平凡社 1970
- 2) 宮田 登「子ども、老人と性」『宮田登 日本を語る』12 p29 吉川弘文館 2007
- 3) 福田アジオ「子ども組とムラの教育」『子ども組』フォークロアの眼 4 p119 国書刊行会 1977
- 4) 飯島吉晴『子どもの民俗学』p65 新曜社 1991
- 5) 宮本常一「日本の子どもたち・海をひらいた人びと」『宮本常一著作集 8』p88 未来社 1975
- 6) 宮田 登「子ども、老人と性」『宮田登 日本を語る』12 p6 吉川弘文館 2007
- 7) 飯島吉晴『子どもの民俗学』p11 新曜社 1991